

「母と僕の思い」

熊本県立菊池支援学校

高等部 1 年 3 組 白石 瑞希

僕が学園に入所したのは、中 3 のときだった。それまでの僕は、「親なんてどうでもいい」と思っていた。親のお金をとったり、親に手を挙げたりしていた。親だけでなく、兄との関係も悪かった。3 日に 1 回のペースで、僕が親に怒られたときや兄の機嫌が悪いときは、兄から手を挙げられることがあった。このような生活から僕を守るという理由で、親は僕を学園に入所させた。だけど、はっきり言って僕は学園が嫌だった。どうせ親が自分のことが嫌いだから学園に入れたんだろうと思っていた。でも、それは違っていた。本当に僕のことを思って、守るために学園入所を決めたのだと分かった。

学園に入所してからも、親と会えばけんかしていた。また、入所した事へのイライラをぶつけるように、問題を起こした。しかし、問題を起こす僕を親は見捨てないでいてくれた。けがをしてご飯が食べられなかったときにゼリーを買ってきてくれたり、食べやすいものに作ってくれたりして、「優しいな」と思った。こんな問題ばかり起こす自分なのに、なんでこんなに大切にしてくれるのだろうと思った。友達とけんかをして悩んだときにも、「もう知らない」と言えたのに、そう言わずに僕の話聞いてくれた。

このように、親の思いに気づいた僕はこう思った。

「僕を産んでくれてありがとう」

「今でも自分のことを大切に育ててくれてありがとう」

もう親を裏切ったりしないと思った。だから、今の学園に入ってから、親に手を挙げなくなったし、親のお金を取らなくなった。毎日、学校にも行くようになったし、1 日授業を受けるようになった。高等部では、社会に出て働くことを目標に頑張っている。大人になってお金を稼ぐようになったら、親に感謝の気持ちを込めて旅行に連れて行きたい。

今までありがとうございました。

これからも、よろしくお願いします。